PLAT CALENDAR

September 9

1［木］—**2**［金］パルコ・プロデュース2022
『VAMP SHOW—ヴァンプショウ—』◉PLAT主ホール

2［金］プラットワンコインコンサート 山本愛花音
「Prayer for peace ～平和への祈り…そして、願い～」
◉PLATアートスペース

3［土］—**4**［日］第2回SONG&DANCE in AICHI 2022年秋
◉PLAT主ホール

4［日］TRIO de CANTABILE 2nd CONCERT
オペラ《フィガロの結婚》—ダイジェスト公演—◉PLATアートスペース

10［土］—**11**［日］舞台手話通訳付き公演
『楽屋—流れ去るものはやがてなつかしき—』◉PLATアートスペース

11［日］K☆STAR Dance Studio Show Case Vol.6
◉PLAT主ホール

17［土］Sunset Live 2022～琳佳 & Her Friends～
◉PLATアートスペース

18［日］第55回東三民踊まつり◉PLAT主ホール

18［日］金井ゆかり&野畑さおり 二台ピアノの響演 VOL.2
◉PLATアートスペース

23［金・祝］曽部遼平 増田達斗 リートデュオリサイタル
◉PLATアートスペース

23［金・祝］—**24**［土］豊橋演劇鑑賞会第292回例会
トム・プロジェクト『風を打つ』◉PLAT主ホール

28［水］新津くらら ヴァイオリンリサイタル「神話の世界へ扉を開く」
◉PLATアートスペース

30［金］ミュージカル『夜の女たち』◉PLAT主ホール

October 10

1［土］—**2**［日］ミュージカル『夜の女たち』◉PLAT主ホール

7［金］Naoyuki MANABE GAGAKU Ensemble 豊橋公演
◉PLATアートスペース

8［土］2022ブルグミュラーコンクール豊橋地区予選
◉PLATアートスペース

9［日］グローリアコンサートNo.2◉PLATアートスペース

10［月・祝］荒井嗣雄 第18回テノール・リサイタル
◉PLATアートスペース

13［木］—**14**［金］『住所まちがい』◉PLAT主ホール

16［日］豊橋吹奏楽団
「Special Concert by theater and wind orchestra」
◉PLAT主ホール

18［火］第49回 桂文我独演会◉PLATアートスペース

22［土］中部西ブロックユネスコ活動研究会◉PLATアートスペース

30［日］豊橋ゆかりの日本舞踊家の競演「第31回吉田をどり」
◉PLAT主ホール

表紙／仲村トオル『住所まちがい』
撮影：二石友希
裏表紙／江口のりこ『夜の女たち』
撮影：山谷佑介
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
令和4年8月発行57号［隔月発行］

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2022年9月—10月
vol. 57

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

プラットニュース

CONTENTS

表紙
『住所まちがい』
仲村トオル

2
INTERVIEW:1
『楽屋—流れ去るものはやがてなつかしき—』
女性がどう選び、どう生きていくか。
樋口ミユ

INTERVIEW:2
作品の世界観や情報をいかに等しく伝えるか。
加藤真紀子　高田美香　水野里香

6
INTERVIEW:3
ミュージカル『夜の女たち』
敗戦で全てがひっくり返った
戦後の空虚を歌にのせて。
長塚圭史

8
INTERVIEW:4
『住所まちがい』
白井さんの
おしゃれな感覚の中の
住人でいたい。
渡辺いっけい

10
INTERVIEW:5
新津くらら
ヴァイオリンリサイタル
「神話の世界へ扉を開く」
音楽の歴史の中に
自分たちが居て、
音楽を受け継いでいく。
新津くらら

12
INFORMATION
PLAT
主催公演情報

14
PURA PURA
バラコの寄り道ぷらぷら
「縁（えにし）」

15
SUPPORT
TICKET CENTER

裏表紙
『夜の女たち』
江口のりこ

INTERVIEW : 1

女性がどう選び、どう生きていくか。

演出 樋口ミユ

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

矢作── まずは2021年2月に上演した『凛然グッドバイ』での舞台手話通訳付き公演の印象をお聞かせください。

樋口── とても不思議な経験でした。表現が深くなる、厚くなる、ということを実感しました。俳優の発する言葉を手話という言語に訳すだけではなく、俳優が生み出す見えない空気までもリアルタイムに受け取って表現をしてくれているから、この表現の深さ、厚さに繋がるのだなと感じました。手話通訳がはいることで、俳優の演技を増幅してくれる。わたしは手話という言語が分かるわけではないのに、俳優の表現がより分かる、そういう不思議な経験でした。手話通訳者もまた表現者なのだなと思いました。俳優たちも、率直に「俳優より大変じゃないですか」と驚いていました。

矢作── 手話通訳者が出演者のように舞台にあがることや、同時通訳とは言いながらもタイムラグや、少しこぼれる部分があるなど、演出家としてそれをどう調整したのでしょうか。

樋口──『凛然グッドバイ』では手話にない単語や表現がたくさんあって、新しい手話を作ってくださいました。タイムラグやこぼれるところは手話通訳さんたちや監修の河合さんが本当に細かく丁寧に考えてくださいました。演出としては調整というよりも、舞台空間に俳優とともに存在することで、通訳さんたちもこの作品を支える登場人物であると、明確にしました。

矢作── 今回は、清水邦夫さんの代表作の一つである『楽屋』に取り組むに当たりどのようなことを意識していますか。

樋口──『楽屋』はいろんなところで、いろんな方々が上演をしている作品だからこと、今回わたしたちはどのようにこの作品を捉えていこうかを考えます。役者として生きていく人生とは、どういうことか。役者でいるためにはどんな思想や信念が必要なのか。演劇をやっているわたしたちだからこを身につまされることがたくさんある。大事な信念、思想なのに、それに固執しだしたときに苦しむ。そうなれば信念を貫こうとすればするほど、実は自分の首絞めてしまうこともある。この戯曲に登場する4人の女優は、このくらいでいいか、と妥協しない。振り切って生きていると思うんです。突っ走る。それぞれ4人が火花みたいにはじけて光る。そんなイメージを俳優たちと一緒に立ち上げていけたらと思っています。

矢作── 4人の登場人物のうち1人をオーディションで選びましたが、オーディションについて印象をお聞かせください。

樋口── 本当にたくさんの応募がありまして、とっても有意義で楽しかったです。たくさんの中から、たったひとりだけを選ぶという行為は苦しくもありましたが、オーディションというのは出会う場なのだと実感しました。それは演技がうまいとか、特徴的とかではなく、他の3人の俳優たちとどう絡み合うだろうかなど、公演のいろんな条件にカチッとはまる人物に出会えるのがオーディションなんだと思いました。例えば演出が私でなかったり、いろんな条件が違えば、全く違う人を選ぶかもしれない。だからこそ、選んだからには責任を持つことは忘れてはいけないと思いました。

矢作── その4人の方と、どのような『楽屋』を作りたいかイメージをお聞かせください。

樋口── 今回のキャストは20代が1人、30代が2人、40代が1人の女性4人です。この作品は、45年前の1977年に書かれた台本ですが、清水さんは女優というより、表現者という人間を描いているから『楽屋』が廃れていくことはないのだと思います。でももしかしたら、これからの未来には女優という言葉はなくなっていくかもしれません。

この女優たちが劇中で出演している作品の演出家は、きっと、男性なのだろうなと想像します。だからこそ女優という言葉が成り立つ。女優として舞台に立つことの裏側に、男性の演出家にどう選ばれるかを無意識に模索して苦しんでいるのかもしれないなと想像します。それを、性別と関係のない「人間」という演出家を置き、誰かに選ばれるという無意識の依存ではなく、女性が自らすべてを意識的に選んでいく、という覚悟が見える作品にできたらなと思います。現代の女性はきっとそのことを根底に考えながら生きている。今は具体的に言語化できないけれど、女性がどう選び、どう生きていくかということを俳優たちと話し合いながら作っていきたいなと思います。

矢作── オーディション以外の3名の俳優の方をご紹介していただけますか。

樋口── ののあざみさんは19歳のときから一緒に劇団をやっていた一番の仲間で、劇団解散後も私のお芝居によく出演してもらっています。とても信頼する俳優の一人です。私のやるべきことをよく理解しているので、ののさんが現場にいてくれることで、他の俳優さんたちとわたしの橋渡しのような役割も担ってくれます。女優Aはののさんだなと一番初めに決めました。むちゃなことを振っても、それに必ずチャレンジしてくれる。今回も必須な存在です。服部容子さんは、言葉を選ばずに言うならスロースターターで、器用にどんな役でもすぐにこなしてしまうというタイプの俳優ではありません。だけどそれは演技に対して嘘をつかないから。自分がきちんと腑に落ちたとき、表現はとても深く変化します。華やかさを持っている彼女だからこそ、女優Cを演じられるんじゃないかと思いました。大浦千佳さんは座・高円寺のアカデミーの同期なんです。去年の『凛然グッドバイ』のときにオファーをしたのですが日程があわず、今回リベンジで出演をお願いしました。男に振り回され、男のために死ぬことは決してないだろう彼女だからこそ、女優Bに挑戦してほしいなと思って声をかけました。

矢作── 舞台手話通訳付きの公演は、まだ実績数が少ないので、手法としての可能性をチャレンジをしつつ、観客に見てもらえるクオリティーの高い作品として創造することと、演劇として表現の可能性を広げていくという両面での取り組みが劇場としては必要だと思っています。どのような作品になるか楽しみにしています。ありがとうございました。

樋口ミユ［ひぐち・みゆ］／劇作家・演出家。Plant M主宰。劇団Uglyduckling旗揚げ以降、解散までの劇団公演32作品の戯曲を執筆する。劇団解散後は、座・高円寺の劇場創造アカデミー演出コースに編入し、佐藤信氏に師事。2012年にplant Mを立ち上げる。大阪、東京とフットワーク軽く飛び回り各地で公演をしている。2011年から2021年の10年間、3月春分の日に東日本大震災のチャリティリーディングを行った。

9月10日［土］、11日［日］14:30開演
作＝清水邦夫
演出＝樋口ミユ
手話監修＝河合依子
出演＝ののあざみ、大浦千佳、服部容子、小野里満子
舞台手話通訳＝加藤真紀子、高田美香、水野里香
会場＝PLATアートスペース

舞台手話通訳付き公演

『楽屋 ―流れ去るものはやがてなつかしき―』

演じるとはなんであるか。役者とはなんであるか。

INTERVIEW：2

舞台手話通訳付き公演

『楽屋 ―流れ去るものはやがてなつかしき―』

作品の世界観や情報をいかに等しく伝えるか。

舞台手話通訳 加藤真紀子 高田美香 水野里香

聞き手 加賀茅捺 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部

加賀―― お三方が、「舞台手話通訳」に関わるようになったきっかけをお聞かせいただけますでしょうか。

加藤―― 演劇活動は高校生のころから、それとは別に、手話は20年くらい前に学び始めました。十数年前に聾者の友人に、私が関わった市民演劇を観たいと通訳を頼まれたことがあります。大変でしたが、「すごくよかった、何言っているかわかって楽しかった」と。その後、舞台手話通訳者養成講座（第1期の横浜会場）を受講し、TA-net（シアター・アクセシビリティ・ネットワーク）との関わりが始まり活動しています。

高田―― 舞台は子どものころから、憧れとしてずっとあったのですが、たまたまTA-netの舞台手話通訳養成講座を豊橋で受講したのがきっかけです。それから演劇公演で何回か通訳をさせてもらって。めっちゃ面白い。

水野―― それまで普通に手話通訳を務めてきました。医療、学会、大学の研究などの専門性に特化した手話通訳者が必要な場合もありながらも、地域で活動する中では、ありとあらゆる分野の対応を迫られます。私も専門性を持った手話通訳者になりたいと思い、舞台手話通訳養成講座に参加いたしました。

加賀―― 日常の中での手話通訳と舞台での手話通訳とで、違いはありますか。

水野―― やはり観客がいるところが一番違います。講演も状況としては似ていますが、講師の先生のお話をそのまま伝えていく。舞台は、メインは俳優さんたちやお芝居を、観客の方に観ていただきながら、音の情報をどれくらい聾の方たちに伝えていけるかです。目の情報が大事なので、俳優さんたちのお芝居、演劇を観てもらいつつ、そこにどのように情報を入れ込み、視線の誘導するのかを考えます。

加藤―― 普段の通訳だと、相手に理解してもらうことをまず意識します。その人のわからないことをいかに合点してもらうのかにメインを置く。舞台の場合は、まず作品を正しく理解しなくてはいけません。聞こえる人も聞こえない人もどちらも観るので、聞こえる人たちに届いている世界観や情報を、いかに同じように伝えるかを意識します。別の作品になってはいけないし、情報を伝えすぎてもいけない、聾者の想像力、イマジネーションを壊さないようにしなければいけないと思っています。

高田―― 当然どちらも翻訳で、日本語が母語でない人に、わかりやすく、どう伝えようと考えるのは同じですが、舞台では意味の等価だけではなく、例えば今回の台本ではすごく古い時代の翻訳のセリフは、日本語は違うが意味は同じ。これをどう伝えるか。場合によっては、舞台の俳優の演技を見てもらってそこから感じ取ってもらう。

加賀―― 舞台手話通訳に関わることによって、手話に対する考え方やそれに限らず自分に何か変化がありましたか。

加藤―― 自分が演劇活動をするときに、手話通訳者の目線が入るようになりました。台本の翻訳をするときに、この奥にはどんな意味があるか、これを手話でやるにはどうするかと考え、そこから視点が変わってくる。普段の手話の会話でも、その世界というか、内容をいかに工夫して伝えるのかをより考えるようになりました。普段↗の演劇活動では、自分が作品の中に入りますが、舞台手話通訳は客観視する。そういうところで演出家の話を聞けるので、今までと違う発見があります。今作品を台本から作っているのですが、どう表現したら、これは伝わるのだろうと別の視点で考えるようになりました。

高田―― もともと通訳は自分の母語がしっかり確立されていないと駄目だなと思いながら、日々勉強しているんですが、単語だけではなく「この手話はどんな意味を持ち、どんな日本語に翻訳できるだろう」とか、より深く考えるようになった。あと、大変だけど、周りからも舞台をやっているときが一番楽しそうと言われ、そこが大きく変わったかな。

水野―― なおのこと演劇に興味を持つようになりました。お芝居のトータルな流れに、どれだけ舞台手話通訳として入り込んでいけるか。多くの人が関わる中で、どんな立ち位置でいたらいいのかもわからないので、最近、地元の小さな劇団の研究所に週3回通い始めました。基本的には俳優を養成するのがメインですが、それでもお芝居をトータルにつかめ、参考になるならやってみようと。こうした点が、大きく変わりました。

加賀―― 前回の『凛然グッドバイ』を踏まえて、今回の作品での目標や意気込みがあればお教えください。

加藤―― まったく異なる世界の作品にチャレンジするので、どんな世界になるのだろう、『楽屋』という4人芝居の中に私たちはどんなテイストで入ることができるのだろうと、ワクワクしています。私の役割は、聞こえない人に演劇作品を届けることですが、聞こえる人に対しても、こういう世界があるのだと発信していく役目も。そこも広がっていくのを期待しています。手話通訳者も同じメンバーで2回目だからこそ、同じ認識の元に進んでいけて、また違う世界観がつくれると、今から楽しみにしています。

高田―― 『凛然グッドバイ』では、片言で繰り出される言語をどのような片言の手話に持っていくかという難しさがあった。今回は同じ長いセリフで、内容は同じでも、翻訳した時代が違う、言い方とか時代の古さ、翻訳の仕方の違いをどのように伝えるかに頭を抱えながらも、聾の方たちに「舞台って面白い」と思ってもらいたい。聞こえる人たちにも「舞台手話通訳が入るとこうなり、こういうのも面白いな」と思ってもらえる舞台にしたいです。

水野―― 『凛然グッドバイ』のときは1回公演だったので、もう1回やりたいなと3人とも思っていました。前回と異なる作品でまた機会をいただけて、聾の方が観たときに「芝居が楽しいな」とか「そんなふうに俳優さんたちがやり取りをしてるんだ」が臨場感を持って伝えられたらと思います。

加賀―― ありがとうございます。

加藤真紀子［かとう・まきこ］／手話通訳士。TA-net舞台手話通訳養成講座2018年度受講。10代から演劇を始め、主に愛知県内で活動を行うほか、現在は手話通訳者として働きながら、舞台手話通訳者として活動中。2019年8月東京演劇集団風・バリアフリー演劇『星の王子さま』出演他。

高田美香［たかだ・みか］／手話通訳士。Ta-net舞台手話通訳養成講座2019年度受講。福祉団体での手話通訳派遣業務などを経て、現在は高齢者施設相談員として勤務。自治体などの登録手話通訳者として活動しながら、舞台手話通訳者として幅広く活動中。

水野里香［みずの・りか］／手話通訳士。地方公共団体、福祉団体での専従手話通訳者、高等教育機関での手話通訳等専門支援員、聴覚障害児通所施設サービス管理責任者を経てTA-net舞台手話通訳養成講座2019年度受講。

舞台手話通訳付き公演『凛然グッドバイ』（2021年2月）舞台写真

INTERVIEW:3

敗戦で全てがひっくり返った戦後の空虚を歌にのせて。

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

上演台本・演出 **長塚圭史**

長塚圭史［ながつか・けいし］／劇作家・演出家・俳優。1996年、演劇プロデュースユニット阿佐ヶ谷スパイダースを旗揚げし、作・演出を手掛ける。(17年劇団化)。08年、文化庁新進芸術家海外研修制度にて1年間ロンドンに留学。11年、ソロプロジェクト・葛河思潮社を始動。17年、新ユニット・新ロイヤル大衆舎を結成。21年4月よりKAAT神奈川芸術劇場芸術監督。KAATでの近年の演出作品に『王将』三部作(21年／構成台本・演出・出演)、『近松心中物語』(21年／演出)、『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』(22年／上演台本・演出・出演)など。

矢作── 溝口健二監督の映画『夜の女たち』を原作に舞台化しようと思われた理由をお聞かせください。

長塚── 何年か前に『夜の女たち』を見た時に衝撃を受けました。この映画は1948年公開なんですが、完全に占領下にあった時代に実際の場所で撮影されており、ドキュメンタリーのように見えた部分も強くあって舞台背景なども強いインパクトが残りました。考えてみると僕らは占領下時代のことを教育上はっきり教えられてこなかった。それがなんか妙だなとずっと残っていたのです。

この映画を今の人たちはあまり観ていないのかなと思いますが、当時は当たったのです。同時代のことを扱った映画だから、当たったのだと思います。社会現象含めいろんな隙間があるこの作品で描かれた時代の背景を写しながら、国家を信じて戦争で戦ったあとの男たちの空虚みたいなものを含めて形にする方法はないか、それを説教くさくするのではなく、と考えた時に、ミュージカルでという考えがふと浮かんだのです。

ミュージカルという表現は、本来なら言葉にしない心理や、説明しないでいいはずのことを歌という形にのせて説明できる。この方法は非常にありだなと思っており、以前から心の内であたためていて、今回KAATの新作の企画として提案し、実現しました。

矢作── ミュージカル化するパートナーといえる、音楽の荻野清子さんの魅力をお聞かせいただけますか。

長塚── 荻野さんとは過去何本ものオリジナル作品を一緒にやっていただいて、強い信頼があります。敗戦で全てがひっくり返った戦後を描くに当たって、ミュージカルの俳優さんたちと作るというイメージがあまり湧かず、未知なるものに向かっていく、その世界を俳優たちと共にミュージカルとして紡いでみたいと荻野さんに話したら、「それは絶対に面白い」「いろんな可能性がある」と言ってくださいました。彼女は、劇団黒テントでずっと活動されていたこともあり、音楽と俳優の関係について非常に視界が広い方です。

矢作── 長塚さんにとって初のオリジナルミュージカルの演出ですが、ミュージカルには、これまでどういうイメージがあったでしょうか。

長塚── 昔は好きかというとそうでもなかったです。ただ、十数年前にニューヨークであるミュージカルを観て、ガラッと変わりました。人間は、突然歌うわけがない、でもそういうミュージカル独特の表現によって、観客の心に響くこともある。そういう強い虚構性をもつ作りにだんだん興味が強くなり、『十一ぴきのネコ』で音楽劇を作り、『イヌビト～犬人～』でも歌を取り入れました。『夜の女たち』は、心理を描くべきだから、ずっと議論するわけにはいかない。つまらなくなりそうなところを、歌いあげる。なによりも、ト書的な世界、つまり、台詞で「ここは荒廃の地」とはあまり言いませんが、歌だと言えてしまうのが面白い。まだ制作中ですが、シナリオのト書はかなり注目して使おうと思っています。

矢作── 振付の康本雅子さんへはどういうことを期待されているのでしょうか。

長塚── 言葉の発想から体の発想にグッと広げるときに、振付家を必要とする。今回は、焼け野原のようなセットの中で、女性たちが仕事をするときや、それぞれ辛さを抱えたりするときに、その広い空間の中でどう動くか、そういう心理を体にのせていくことを康本さんと相談していけるといいと思っています。

矢作── 主人公である姉妹役。江口のりこさんと前田敦子さんの魅力についてお伺いできますか。

長塚── 江口さんは10年近く一緒に作ってきていて、会ったときからとてもインパクトがありました。役者として思考を止めませんし、発想も豊か。一本の芝居を背負えると数年前から感じていました。より高みを一緒に目指せる仲間だと強く信頼しています。

前田さんは、性質のいい女優さんで、近年、舞台に対してもスタンスを広げようと関心が高まっていると感じています。姉の房子というまじめな性質に、奔放というかパッとひらけた妹の夏子、それも暗い過去をいだきながらひらけた視界ですが、そういう女性を演じてもらうのに面白いのではないかと。稽古始まって、やっぱり突き抜けているなあと。日々楽しみです。

矢作── 北村有起哉さんと大東駿介さんについてもお聞かせください。

長塚── 北村さんとは同世代で、これまで共にいろんなことを考えながらやってきた。新しい扉を開きたいというときにいてほしい俳優の一人。最近映像での活躍も増えていますが、舞台らしい舞台俳優なので、チャレンジもたくさんあるし、今回参加してもらえたことで面白いものが作れると思います。大東さんも自由な発想の持ち主だし、とってもオープン。好奇心も旺盛。今回の作品は、難しいことだらけですが、そういうときに明るい存在となる俳優だと思う。敗戦で信じたものがなにもかもひっくり返る社会のなかで、その空虚をどう埋めていこうかを追いかけるのは、哀愁になりがちですが、30代の大東さんが演じると現代性も持つと思う。

歌や踊りなど慣れないことが多いので、時間がかかるとは思いますが、頭の中で考えた答えにただ当てはめるだけでなく、歴史背景を一緒に知り、試行錯誤しながら、繰り返し上演できる作品に作っていくことができたらと思います。

矢作── 今度こそ豊橋で長塚さんの新作を拝見したいと思っています。お客さまにメッセージをいただけますか。

長塚──『近松心中物語』で伺えなかったことは心残りですし、KAAT神奈川芸術劇場としてあらためて、『夜の女たち』を最高のスタッフ、キャストでお届けします。チャレンジに満ちたエネルギッシュな作品に必ずなると思います。どうか楽しみにしていてください。

矢作── ありがとうございます、お待ちしております。

9月30日［金］18:30開演
10月1日［土］13:00開演
10月2日［日］13:00開演
原作＝久板栄二郎
映画脚本＝依田義賢
上演台本・演出＝長塚圭史
音楽＝荻野清子
振付＝康本雅子
出演＝江口のりこ、前田敦子
伊原六花、前田旺志郎、
北村岳子、福田転球
大東駿介、北村有起哉ほか
会場＝PLAT主ホール

ミュージカル
『夜の女たち』

戦後間もない大阪釜ヶ先を舞台に、
夜の闇に墜ちていった女性たち

撮影：細野晋司

INTERVIEW：4

『住所まちがい』

同じ場所で遭遇し、混乱に巻き込まれる男性三人と謎の女性

10月13日［木］13:00開演、19:00開演
10月14日［金］13:00開演
原作＝ルイージ・ルナーリ
上演台本・演出＝白井晃
出演＝仲村トオル、田中哲司、渡辺いっけい、朝海ひかる

白井さんのおしゃれな感覚の中の住人でいたい。

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

出演 渡辺いっけい

矢作── 今回白井晃さんの演出作品ですが、どんなことを期待されていますか。

渡辺── 僕は、どちらかというと猥雑な小劇場とか、アングラに近いところで過ごしたので、白井さんの非常におしゃれな感じがまぶしいというか。小ぎれいな人が出るのが合っていると思っていました。最近はお芝居のオファーを受けるときに、初めての人に挑戦というか、今回で言うと白井さんと初めてご一緒するというのが大きいですね。

「白井さんはすごく稽古をするタイプだよ」と聞いていて、僕は稽古が嫌いなわけではないので「そこは大丈夫だな」と思いました。あとは演出家の言葉を、一を聞いて十を知らなければいけないので、どう読み解いていくか。若いときだと自分が「こうやりたい」という塊だったので、演出家と合わないときはぶつかることもありましたが、今は、演出家が求めている世界を僕も見たい。せっかくだから白井さんのおしゃれな感覚の中の住人でいたいので、白井さんの頭の中にしかない、「こういう感じにしたい」を読み取りながら、早めに照準を合わせていきたいと思います。

矢作── 共演される仲村トオルさんと田中哲司さんは、初共演でしょうか。

渡辺── 舞台では初めての人ばかりです。映像は、演じている姿の一部を切り取られるのですが、舞台は演じている役者さんの姿勢全体まで見える。特に仲村トオルさんは、本当に真面目にその役に入り込んでいる。哲司さんは、僕にはできない力の抜き方というのかな、舞台で力を入れずにその場にいるということができる。「不思議だなあ、この人は」といつも思います。そういう意味で印象深い二人なので、非常に楽しみです。

矢作── いっけいさんが、お芝居を始められたきっかけをお聞かせください。

渡辺── 高校の文化祭です。出番を袖で待っていると、客席の生徒がワーッとすごい盛り上がっていて、学びの空間が文化祭や体育大会で一日だけエンタメの場に変わる。「役者になると毎日こういうお祭りをやるんだ」と気付いたんです。次の日に図書室に行って、赤本でお芝居を勉強できる大学を探した。僕みたいなタイプはちゃんとお芝居の勉強をしてからでないと無理だと思い、「東京に行って役者になろう」とは思わず、大阪芸術大学に進学しました。

大学へ入って1年目は挫折の連続でした。最初に役者志望の生徒が一斉に山に登るのですが、高校のときは美術部だったので体力もなく、途中でへばって頂上へ行けなくて。講師と二人で下山しながら「渡辺、スタッフという手もあるからな」と、4月の最初にそれ言われて、目の前が真っ暗になりました。その後、授業の一環で、毎週『ロミオとジュリエット』の稽古を繰り返し、年度末に進級試験を兼ねた舞台を上演していたのですが、僕はそんな失態をやらかしたので役が付かなかった。ところが、夏休み過ぎたらロレンス神父という重要な役をやる人が学校に来なくなったのですが、他の人はみんな役を割り振られていて、役を振られていなかった僕がやることになった。それを2学年上にいた、いのうえひでのりさんが観ていて、劇団☆新感線に誘われたのです。そこから変わりました。そのやめた人がもし学校をやめていなかったら、僕はどうなっていたかわからない。何がどうなるか、わからないですね、人の運命は。

矢作── 私は、野田地図（NODA・MAP）の『キル』で初めて拝見したいっけいさんが、とても印象に残っています。

渡辺── 野田秀樹さんの作品の中でも『キル』という作品自体がなかなか個性的だった、ということももちろんあるのですが、実はあれも僕は代役だったのです。本当は別の方が僕の役をやる予定だったのですが、事情により当初の予定していた日程がずれてしまい、その方が出演できなくなり、結果として僕がやることになったんです。

矢作── 様々な作品で、いろいろな地方で出演されていますが、どの様なところに楽しみとか興味を見いだしているのでしょうか。

渡辺── 土地によって匂いというか空気が違います。なによりその空間、劇場の色というのがあるのです。だから僕は、地方に行ったときは早めに劇場に入って、ボーっとしててもいいし、走ってもいいんだけど、劇場で過ごしたい。その中で、馴染むというかにじみ出てくるものは僕にとってすごく大切なのです。

矢作── 今回の上演は、出身地である豊川の方も期待していると思うのですが。

渡辺── 以前は地元のことを意識しないで役者をやっていたのですが、平田満さんが出身地の豊橋のことに関わりだしたときに、「平田さんってそういうタイプじゃないのになあ」と、ご本人にもそんなことを言ったら、「なんか変わってきたんだよ、意識が」なんて言っていました。

自分も、「せっかくだからやはり見てもらいたい」と思うし。自分がきっかけで「演劇を観たことない」という同級生が観に来ることはすごく意味がある気がして。それで「へえ面白いんだね、芝居」と思ってくれてPLATに通うようになるきっかけになればいいなと、歳をとってから考えるようになりました。

一応「プロの役者です」という顔をしていますが、高校の文化祭でお祭りだと思ってやっていた自分と全然変わっていません。「相変わらずだな、お前」と言われたいし、「こんな感じで生きてます」という生きざまを見せたいと思います。

矢作── 最後に、観に来ていただくお客様にメッセージをお願いします。

渡辺── ここ何年は「芝居どころじゃない」という環境で、「お芝居を観に来てくれ」と高らかに言えなかった。今も多少そういう意識は残っていますが、やはりエンターテイメントはあったほうがいい。活力を与えられるし、観てよかった、明日からのエネルギーを残せるものに参加していきたいのです。この『住所まちがい』という作品も、なかなか残るものがあるので観に来ていただきたい。損はさせないと思います。

矢作── ありがとうございます。

渡辺いっけい［わたなべ・いっけい］／ 1962年生まれ、愛知県出身。83-85年、劇団☆新感線に、85-88年、状況劇場に所属。数々の舞台、映画、TVドラマなどで活躍。近年の出演作にTVドラマ「邪神の天秤公安分析班」（22年、WOWOW）、「ラブシェアリング」（22年、ひかりTV）「ハレ婚。」（22年、ABC）、「逃亡医F」（22年、NTV）など。舞台では、『てなもんや三文オペラ』（22年、作・演出：鄭義信）Takayuki Suzui Project OOPARTS Vol.6『D-river』（22年、作・演出：鈴井貴之）、『カノン』（21年、演出：野上絹代）、など。6月25日より土曜ドラマ「空白を満たしなさい」（NHK）に出演。主演映画「マリッジカウンセラー」（前田直樹監督）秋公開予定。

撮影：二石友希

若手音楽家育成事業
新津くらら ヴァイオリンリサイタル

「神話の世界へ扉を開く」

ヴァイオリンとピアノで奏でる神話の不思議な世界

9月28日［水］14:00開演
出演＝新津くらら（ヴァイオリン）、柴垣健一（ピアノ）
会場＝PLATアートスペース

INTERVIEW：5

音楽の歴史の中に自分たちが居て、音楽を受け継いでいく。新津くらら

ヴァイオリン

聞き手 石田晶子 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部

新津くらら［にいつ・くらら］／豊橋市出身。2005～2008年まで豊田市ジュニアオーケストラ団員。国立音楽大学を首席で卒業。同時に武岡賞を受賞。室内楽コース修了。卒業演奏会、第82回東京読売新人演奏会に出演。京都・国際音楽学生フェスティバルに学校選抜代表により参加。学内オーケストラのコンサートミストレスを務める。ブルクハルト国際音楽コンクール審査員賞受賞。ヴァイオリンを松本茂、大関博明、青木高志の各氏に、室内楽を徳永二男、大関博明の各氏に師事。

石田── 新津さんは2016年度のプラットワンコインコンサートの出演者オーディションに合格して以来、PLATの様々な企画にご出演いただいていますね。

新津── プラットワンコインコンサートでの出演が2回、その後は交流スクエアで子ども向けの無料コンサートや、2019年のプログラム説明会ではダンサーの中村蓉さんとのコラボレーションで演奏させていただきました。オーディションを受けた当時は、大学を卒業してしばらく経った頃で、演奏の機会を強く求めていた時期だったと思います。1時間のフルコンサートをまるまる自分で組み立てて企画することは、私にとって挑戦で、すごく良い経験をさせていただきました。それが積み重なって、今に至ります。

石田── ヴァイオリンはいつから始められたのですか。

新津── 3歳からです。私は豊橋市出身で、本郷中、光ヶ丘女子高等学校に通い、東京の国立音楽大学に進学しました。卒業後は豊橋市に戻り、演奏活動や講師をしています。学生時代は、あんまり目立つタイプではなかったんですけど、辛いことも楽しいことも、ヴァイオリンと一生懸命ぶつかりながら、なんとか乗り越えてここまでやってきたという感じですね。

石田── 新津さんの思う、ヴァイオリンの魅力について教えてください。

新津── 弦楽器には、音を作っていく要素があります。ちょうどよく聴こえるように音程の取り方をわざと微妙に変えるのです。長調か短調か、出したい音色にもよりますが、曲を引き立たせるためにあえてほんの少し高めにしたり、低めにしたりして、音の明るさや暗さの調整ができるところが、ヴァイオリンの難しさと魅力だと思っています。

石田── 音を鳴らせば出したい音が出せるわけではなく、常に調整しながら弾いているのですね。

新津── そういうことです。音色と音程への追及は根気と努力が必要で、体力も消耗しますが惜しまず奉仕したいと思っています。曲によって、ドイツの曲ならドイツらしい音が出せるようにすることも自分の中での課題の一つです。弦を指で弾くピッツィカートや、わざと駒の近くで弾いてかすれた音を出すとか、奏法もいろいろで面白いですね。

石田── 演奏をする上で大切にしていることはありますか。

新津── 長い音楽の歴史の中に自分たちが点として存在して居て、音楽を受け継いでいることでしょうか。シューベルトやモーツァルトなど、偉大な当時の音楽家の演奏を聴くことはできないけれど、20世紀の巨匠の演奏家の録音を聴いたりして、当時の空気を想像しながら演奏に取り組んでいます。この巨匠達の演奏から新鮮な発見と恩恵を自分がもらっている感覚があります。一方で、今、ここで自分が演奏することで、お客さんと同じ時間と場所を共有し、作品を更新していく感覚も大切にしています。生演奏の良さというか、生だからこその精一杯のことをやりたいと思っています。

石田── 今回のコンサートのタイトルにもなっている、シマノフスキの「神話」について語っていただけますか。

新津── ピアノの美しい響きの中に、ヴァイオリンが加わってギリシャ神話の世界を繰り広げていくような作品です。3楽章からなり、曲それぞれに≪アレトゥーサの泉≫、≪ナルシス≫、≪ドリヤードとパン≫というタイトルがつけられています。2曲目の≪ナルシス≫は、水面に映った自分の姿に恋をした美少年ナルシスが最後には水仙になってしまうというお話ですが、これに由来して水仙の花言葉はナルシストになったそうです。3曲目に登場するパンは、ヤギの角と足を持った森の神で、パニックの語源でもあります。ギリシャ神話って、調べれば調べるほど深く壮大で、星座や美術、文学、映画、様々なジャンルで共通してちょこちょこ出てくるので、元を知っていくと、どんどん楽しさが膨らんで、世界が広がっていくんです。

石田── 面白いですね。この曲はテクニック的にも難しい曲だと言われていますね。

新津── そうですね。シマノフスキがヴァイオリニストのコハンスキと一緒に作った作品ということもあり、音程の調整が効く弦楽器ならではの特殊奏法がいっぱい盛り込まれているので、そのあたりも楽しんでいただきたいです。ピアノにはない半音と半音の間の音を弾く四分音や、複数の弦を同時に押さえる重音奏法、倍音を出すハーモニクスなどが登場します。こうしたテクニックも織り交ぜることで、神話の不思議な世界観がよく表現されていると思います。

石田── ほかには、ヴァイオリンの名手としても有名なクライスラーの楽曲や、シューベルトの「華麗なるロンド」など、お馴染みの名曲も演奏する予定ですね。

新津── 今回は、楽しく聴きやすい曲も織り交ぜて、様々な方に楽しんでもらえるようにプログラムを組んでみました。災害や紛争、激しい時代の変化など、いろいろと大変なことが多い世の中ですが、マイノリティや個人個人が尊重されることがスタンダードになっていっている時代でもあると感じています。来て下さる方それぞれに、心に引っかかるような音楽との出会いと、交流が生まれたらいいなと願って演奏します。

石田── 楽しみにしています。ありがとうございました。

INFORMATION

PLAT主催・共催公演情報

託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様500円。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

マイセレクト4 対象公演
マイセレクト 2022 4

チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

◉劇場窓口・電話0532-39-3090［休館日を除く10:00－19:00］◉オンライン http://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］◉チケット販売＝販売初日はオンライン・電話のみ取り扱い。翌日以降、残席がある場合は窓口販売あり。

U25・高校生以下割引で案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
◉料金＝U25［25歳以下］：公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下：1,000円◉購入方法＝各公演の一般発売初日から取扱い。◉その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。

高校生と創る演劇『せんをかく』

脚本：田坂哲郎　撮影：みたとも

演出：川口智子

劇団チョコレートケーキ『帰還不能点』

初演舞台写真

二兎社『歌わせたい男たち』

キムラ緑子

山中 崇

相島一之

ワークショップ縁日

2021年の様子

8/23［火］15:00開演
8/24［水］14:00開演
好評発売中
8月23日のみ
プラット親子わくわくプログラム2022
『ククノチ テクテク マナツノ ボウケン』
振付家・北村明子と現代美術家・大小島真木がタッグを組んでお届けする「夏休み」をテーマにしたダンス作品。開演60分前から参加自由できるお面づくり体験や、開演5分前から客席にて出演ダンサーが登場して行う5分間ダンスレッスンなど、おたのしみポイントも盛りだくさんです。
●振付・演出＝北村明子●美術＝大小島真木●出演＝川合ロン、清家悠圭、岡村樹、黒須育海、井田亜彩実、永井直也●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付き］おとな3,500円、U25 1,700円、こども（高校生以下）500円

9/10［土］14:30開演
9/11［日］14:30開演
好評発売中
9月10日のみ
舞台手話通訳付き公演
『楽屋―流れ去るものはやがてなつかしき―』
●作＝清水邦夫●演出＝樋口ミユ●手話監修＝河合依子●出演＝ののあざみ、大浦千佳、服部容子、小野里満子●舞台手話通訳＝加藤真紀子、高田美香、水野里香●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付き］一般2,000円、U25 1,000円ほか※両日とも終演後トークあり。
［**特別協賛＝サーラグループ**］
【関連事業】
8/31［水］18:30開演
映画「こころの通訳者たち What a Wonderful World」上映会
2020年度PLATで上演した「舞台手話通訳付き公演『凛然グッドバイ』」での舞台手話通訳者や、音声ガイドプロジェクトを追った長編ドキュメンタリー映画。
●監督＝山田礼於●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由］500円（『楽屋―流れ去るものはやがてなつかしき―』のチケットをお持ちの方は無料）●申込方法＝①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み②プラットチケットセンターの窓口・電話（0532-39-3090）で申込み

9/28［水］14:00開演
好評発売中
若手音楽家育成事業
新津くらら ヴァイオリンリサイタル「神話の世界へ扉を開く」
●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付き］一般2,000円、U25 1,000円ほか

9/30［金］18:30開演
10/1［土］13:00開演
10/2［日］13:00開演
好評発売中
10月1日のみ
ミュージカル『夜の女たち』
●原作＝久板栄二郎●映画脚本＝依田義賢●上演台本・演出＝長塚圭史●音楽＝萩野清子●出演＝江口のりこ、前田敦子／伊原六花、前田旺志郎、北村岳子、福田転球／大東駿介、北村有起哉ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席10,000円、S席ペア18,000円、A席8,000円、B席6,000円ほか

10/13［木］13:00開演／19:00開演
10/14［金］13:00開演
好評発売中
10月14日のみ
『住所まちがい』
●原作＝ルイージ・ルナーリ●上演台本・演出＝白井晃●出演＝仲村トオル、田中哲司、渡辺いっけい、朝海ひかる●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席9,000円、S席ペア16,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか※13日（木）は終演後トークあり。
［**特別協賛＝サーラグループ**］

11/5［土］13:00開演／18:00開演
11/6［日］13:00開演／17:00開演
11月5日13:00のみ
高校生と創る演劇『せんをかく』
東三河の高校生と、劇場やプロのスタッフがともに創作する演劇公演の第9弾。脚本に、劇作家・俳優であり、福岡市を拠点に活動している非・売れ線系ビーナス主宰の田坂哲郎、演出には、音楽・ダンス・映画・伝統芸能等ジャンルを超えた創作、香港や台湾を中心とするアジアのアーティストとの協働企画を展開する川口智子をお迎えして、高校生たちと舞台作品を創作します。
●会員先行＝9月24日（土）●一般＝10月1日（土）●脚本＝田坂哲郎●演出＝川口智子●出演＝公募オーディションで選ばれた高校生●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付き］一般2,000円、U25 1,000円、高校生以下500円
［**宝くじの助成金で実施します**］

11/10［木］13:00開演
11/12［土］13:00開演／18:00開演
11/13［日］13:00開演
11月13日のみ
『凍える』
●会員先行＝9月3日（土）●一般＝9月17日（土）●作＝ブライオニー・レイヴァリー●翻訳＝平川大作●演出＝栗山民也●出演＝坂本昌行、長野里美／鈴木杏●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席10,000円、A席8,000円、B席6,000円※購入時の座席指定不可。※各発売日初日はお一人様1申込みにつき1公演2枚までの枚数制限あり。

プラット親子わくわくプログラム2022
『ククノチ テクテク マナツノ ボウケン』

11/19［土］13:00開演
11/20［日］13:00開演
11月19日のみ
マイセレクト 2022 4
劇団チョコレートケーキ『帰還不能点』
実在した［総力戦研究所］を題材に、「日本必敗」のシナリオを予測した専門家たちに迫った作品。作中に起こる劇中劇では役割を固定させず、さまざまな役を俳優が演じ分け、その高い熱量で好評を得ました。第29回読売演劇大賞優秀作品賞、優秀演出家賞受賞。
●会員先行＝9月10日（土）●一般＝9月17日（土）●脚本＝古川健●演出＝日澤雄介●出演＝浅井伸治、岡本篤、西尾友樹／青木柳葉魚、東谷英人、粟野史浩、今里真、緒方晋、村上誠基、黒沢あすか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席4,500円、A席3,000円ほか※19日（土）は終演後トークあり。
【関連事業】
9/19［月・祝］13:30～16:30
劇団チョコレートケーキ
「舞台映像」上映会&トーク
11月の『帰還不能点』の上演に先駆けて、座付き作家である古川健さんを招き、劇団チョコレートケーキの『一九一一年』の上映会&トークを行います。
●登壇者＝古川健●会場＝PLATアートスペース●参加費＝無料●定員＝100名（先着）●申込方法＝①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み②プラットチケットセンターに窓口・電話（0532-39-3090）で申込み

12/14［水］19:00開演
12/15［木］13:00開演
12月15日のみ
2022 マイセレクト 4
二兎社『歌わせたい男たち』
2005年に初演し、第5回朝日舞台芸術賞グランプリ、第13回読売演劇大賞最優秀作品賞、優秀演出家賞を受賞し、2008年に再演された永井愛の代表作を14年ぶりにキャストを一新して上演します。ある都立高校の保健室を舞台に、卒業式での「国歌斉唱」をめぐる教師たちの攻防を描き、大きな反響を呼んだ作品です。ご期待ください。
●会員先行＝10月1日（土）●一般＝10月15日（土）●作・演出＝永井愛●出演＝キムラ緑子、山中 崇、大窪人衛、うらじぬの、相島一之●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席6,000円、A席4,000円ほか

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。
●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付］500円

9/2［金］18:30開演
『Prayer for peace ～平和への祈り…そして、願い～』
山本愛花音（ピアノ・作曲）

10/11［火］14:00開演
【振替公演】プラットワンコインコンサート Quintet Azalea
『ボンジュール・アゼリア！～フレンチな音楽はいかが？～』
Quintet Azalea［クインテット・アゼリア］　西前菜々子（クラリネット）、成田萌（ヴァイオリン）、本間京（ヴァイオリン）、三浦可菜（ヴィオラ）、稲田悠佑（チェロ）●会員・一般同時発売＝9月1日（木）

ワークショップ・レクチャー
アートマネジメント講座2022
全国の公共劇場や舞台芸術を支える団体など、舞台芸術に関わる現場で活躍する方々を講師としてお迎えし、そこでの事例紹介等を通してその活動に触れ、アートマネジメントについて学びます。
●日程＝8月19日（金）①10:30～13:30②14:30～17:30●講師＝①塚原沙和（認定NPO法人スローレーベル マネージャー）、②荒井洋文（一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事）●会場＝PLAT研修室（大）●参加費＝無料●対象＝高校生以上、劇場・舞台芸術に興味のある方。●申込方法＝①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み②プラットチケットセンターの窓口・電話（0532-339-3090）で申込み

8/28［日］
プラット夏休みこどもワークショップ
ワークショップ縁日
夏休み最後の土日は、いつもと違う日を劇場で過ごしてみよう！
『えんげきであそぼう』
2日間かけて工作をしたり短い演劇をつくり、最後に発表します。
●日程＝8月27日（土）12:30～16:00、8月28日（日）10:00～12:00●会場＝PLAT創造活動室A●参加費＝無料●対象＝小学1～6年生、2日間とも参加できる人●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX（0532-55-8192）②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み
『げきじょうであそぼう』
劇場のいろんな部屋に、カラダを使ったゲームや演劇づくりが出来るコーナーを用意しています。
●日程＝8月28日（日）12:30～15:30（予定）●会場＝PLAT創造活動室Aほか●参加費＝無料●対象＝小学校以上●申込方法＝8月21日より受付開始①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX（0532-55-8192）②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み
『お店をつくろう』
アートスペースいっぱいにこどもたちが考えたまちを展示します。
●日程＝8月27日（土）10:00～18:00、8月28日（日）10:00～17:00●会場＝PLATアートスペース●料金＝無料（申込不要）

PURA PURA
バラコの
寄り道
ぷらぷら

「縁」

芸術文化アドバイザー
桑原裕子

「サンセットメン」2022年7月上演　撮影：保坂萌

その舞台の公演中止を知らされたとき、私は悲しまなかった。

2020年春のことだった。Covid-19の脅威は始まったばかりで、思えば感染者数も今より段違いに少なかったが、初の緊急事態宣言が出て、演劇界に限らずどの現場でも自粛を余儀なくされていた。だから現在のように出演者に陽性反応が出るなどして急遽中止になったのではなく、チラシが完成した直後の決定だった。

まだ慣れないZoom会議。分割された画面の端で、プロデューサーは泣いていた。私は、ああやっぱりかという小さなため息が出ただけだった。

コロナには慣れていないくせに、悲しむこと、落ち込むことには早くも慣れていた。それまでの数ヶ月で急激に慣れさせられていたからだ。さっさと受け入れて忘れてしまおうと思った。言えなかったが、正直なところホッとしてもいた。まだ台本も書いていなかったし、この舞台では笑いあり歌ありのコメディ・ショウをオーダーされていたものの、不穏な状況下でどうコメディなんて書けば良いのか、わからなかったからだ。

出演してもらう予定だったキャストのことを思い返した。何人かはかつてご一緒した経験のある、よく知る俳優たち。その顔をチラリ思い浮かべるとすこし胸が痛む。けれどまた別の機会にと思えばそれですむことだった。残り半数は初めましての人で、だからきっとこれはご縁がなかったのだ、と素直に思った。

ご縁。そもそもそれはコロナ禍に限らず、演劇というか芸能という業界が“水もの”であると、長年身に沁みて教わってきたことでもある。

若い頃は「ご縁がなかった」と言われて落ちたオーディションもたくさんある。演出の側から自分がそう伝えた人たちもいる。縁があればまた逢えると信じ、実際に何年も経ってから再会した人たちも大勢いる。たまたま空いていたとか、運良く集まれたといった無数の奇跡が成立して演劇公演という物は成り立っている。

「必ずまた再開します」とプロデューサーは約束してくれた。けれど私はその約束も体の内側に通さず、片っぽの耳で止めてしまった。期待して落胆するのが怖かった……と言えば聞こえも良い。けれどほんとうのことを言うと、もはや、やりたいとさえ思っていなかった。

なぜなら私たちまだ、出逢っていなかったからだ。

果たして今年、プロデューサーの有言実行により上演が決定した。あらすじは二年前のものとは違う。あの頃の想いは色あせ、今やりたいこと、観たいものに意識を注ぎ直す。

キャストは奇跡的に全員同じメンバーが集まった。この場合の奇跡は運ではなく皆の努力の賜物だ。この苦しい時世で、誰も演劇を辞めてなかったことがまず大きな奇跡。

マスクつけっぱなし、感染対策しながらの稽古にも慣れた。飲み会がないことにも、定期的なPCR検査にも慣れた。感染は拡大していて、同じ劇場で自分たちの前にやっていた公演や、隣の劇場の公演が次々と中止になった。このダメージだけは……慣れない。どうしても慣れない。

同じ演劇仲間として胸が痛み、落ち込む。そして明日は我が身と激しく怯える。

なぜなら私たちはもう、出逢ってしまったからだ。

一ヶ月以上の時間を、仲間と共にひとつの目標に向かって進んできた。試行錯誤し、苦しみ、笑い、そのかけがえのない時間はもちろん無駄じゃない。だが、その歩みの先に待っているお客様たちと逢えて初めて演劇は完成する。その誕生にこの人たちと立ち会いたいという切望。

仮に中止になったとして、お金のことはもちろん心配。お披露目できないことも悔しい。だが一番にあるのは、仲間と出逢ってしまったこの気持ちを、どうしてくれるのというやるせなさ。それは自身の野望とは全然別の場所にある。

こうして二年越しに上演された舞台「サンセットメン」はあと数日で千穐楽を迎える。予定通り、笑いあり歌ありのコメディ・ショウ。ただ二年前と違うのは、同じ一日を何度もくり返すという、少し不思議なSFになったことだ。登場人物たちは、くり返される同じ日を抜け出そうと、人生をもがいてゆく。

私たちはコロナ禍で、まだまだ苦しみと不安な日々をくり返している。毎日希望を抱き続けるのは舞台を上演するより難しいことかもしれない。しかし同じ一日は二度となく、求めると求めざるとに限らず出逢いも訪れる。出逢ってしまったら、その手を離さず歩き続けるしかない。

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

有限会社 魚伊
電話52-5256

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科（不妊治療）
豊橋市新本町23 豊橋 竹内産婦人科 検索Q

ケンチク クロノ
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

看板広告 アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

なければつくる
ONOCOM
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283（代）

創業文政年間
きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL53-2809

豊橋銀行協会（順不同）
三菱UFJ銀行　みずほ銀行　静岡銀行　名古屋銀行
三井住友銀行　三井住友信託銀行　清水銀行　第三銀行
十六銀行　愛知銀行　中京銀行　大垣共立銀行

創業江戸 御茶席菓子専門店
御菓子司 若松園

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259（小川恵司）

安心・安全な地下駐車場
パーク500
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円（上限4時間まで）に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌
豊橋市植田町関取54 電話0532-25-2115（代）

豊橋名産 ちくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間　月・火・木・金 10:00〜13:00 16:00〜19:00
土 10:00〜14:00　休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久　豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

sala
サーラグループ

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090［休館日を除く10:00−19:00］
オンライン
http://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U25・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、
若い人にお得な料金を設定しています。
◉料金
U25［25歳以下］：公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下：1,000円
◉購入方法
各公演の一般発売初日から取扱い。
◉その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。
一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。

令和4年6月1日からの劇場代表電話の受付時間変更について

穂の国とよはし芸術劇場の代表電話の受付時間を、令和4年6月1日（水）より以下の通りといたします。なお、開館時間・休館日につきまして変更はございません。
◉代表電話番号　0532-39-8810
◉電話受付時間　9:00〜20:00（休館日除く）
◉対応開始日　令和4年6月1日（水）

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810［代表］（9:00−20:00）
開館＝9:00−22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅（JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道）、
新豊橋駅（豊橋鉄道渥美線）直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT